

## マチュア世代の働く女性のセカンドキャリアについての意識調査

西村 美奈子<sup>1</sup>、遠藤 佳代子<sup>1</sup>

### Awareness Survey on Post-Retirement of Mature Age Working Women

Minako Nishimura, Kayoko Endo

#### 【概要】

均等法から 30 年がたち、男性と同等に働く女性が層を形成した初めての世代がこれから定年を迎える。一方でこれまで「定年退職」と言えば男性のマイルストーンであり、女性の定年についての研究は少ない。女性たちがこれからの人生のセカンドキャリアをどう捉えているか、実態を調査し、ニーズを探る。

#### 1. 背景

##### 1.1. 均等法から 30 年

1986 年より施行された「男女雇用機会均等法」から 30 年が経過し、これまで、ごく僅かであった「企業の中で男性と同等に働く女性たち」が、少しずつ層を形成し始めた。男性とともに働き責任ある仕事を任されてきた女性たちは、男性同様に仕事の醍醐味を味わい、仕事を通して充実感や達成感、やりがいを得てきた。そして、この女性たちが今「定年」を意識する年齢に差し掛かってきている(図 1)。

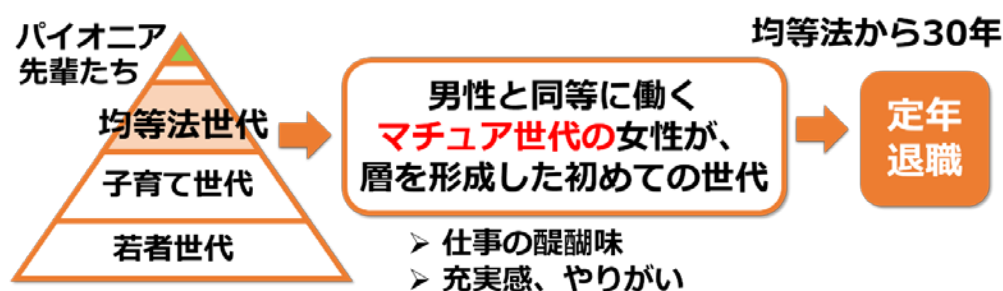


図 1 均等法から 30 年 (筆者作成)

##### 1.2. マチュア世代

この世代の呼称については、様々な呼び方がある。一般的に用いられる「シニア」は、人によりイメージが幅広く、どちらかと言えば高齢者のイメージが強いため敬遠される向き

<sup>1</sup> 昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員

もあり、「シニア」になる前という「プレシニア」という呼称が使われることが多い。

また、元気でアクティブな高齢者を指す言葉として使用されている「プラチナ」世代も昨今ではよく耳にする。今回の研究で用いている「マチュア」は「成熟した」、「大人の」という意味であるが「魅力的な」というニュアンスを含み、一般的には 40 代から 60 代ぐらいまでの、男性よりも女性に使われることが多い。「大人の女性」として社会の中で経験を積んできた女性たちに対して最もふさわしい呼称として、本研究ではこの世代をマチュア世代と呼ぶ。

### 1.3. 女性にとっての「定年」と先行研究

これまで「定年」と言えば、前述のように一般的には男性にとっての人生のマイルストーンであり、最近になり、野村 (2014)、岸本 (2015) らによる著作が出てきてはいるものの、まだまだ女性の定年について語られることは少ない。しかし、男性と同等に責任ある仕事に従事してきた女性たちにとっても「定年」は男性同様に大きな人生の岐路でもある。女性の定年についての研究の必要性は、均等法施行数年後にはすでに袖井 (1988) が指摘している。一方で「女性の定年」は「男性の定年」と基本的には同じで、特に女性だけを取り上げる必要はない、との議論もよく聞かれるが、「女性ならではの何かがあるのではないかと筆者らは考える。これが本研究を始めた原点であり、研究員が所属する企業で受けた定年後（正確には役職離任後）に対する人事からの説明会に参加して感じた「違和感」から来るものである。

定年退職の影響が男性と異なる可能性について袖井 (1988) は相反する二つの理由を挙げている。一つは、女性の場合、家事を担い、また定年前に母親としての役割からの卒業を経験していることから定年退職の影響が小さいのではないかと。もう一つは、男性中心社会の中で男性以上の働きを示すことで地位を確保してきた女性の場合は男性よりも定年に伴う役割喪失によるストレスとなる可能性があるとの見解である。この二つの理由のうち、前者については、男性は仕事一辺倒の生活から定年後の生活に移行するにはかなりの努力を要しているが、女性はすんなりと適応し、自然体で楽しんで暮らしている (徳田、2010) との報告もあるが、一方で、これからシニアになる女性はこれまでのシニア女性のように自然には地域社会に溶け込んでいかないかもしれない。「女性は大丈夫」とは必ずしも言えないのではないかとの問題提起 (倉重、2015) もある。

## 2. 研究の進め方

仮説：定年を前にした働く女性は「定年後の人生をどう生きるか」に不安を抱えており、不安を払拭する何か求められているのではないかと

この仮説をもとに、2016 年度をニーズ発掘フェーズ、2017 年度をシーズ検討フェーズとし、研究を進める(図 2)。 尚、本報告時はニーズ発掘フェーズの本調査実施中である。

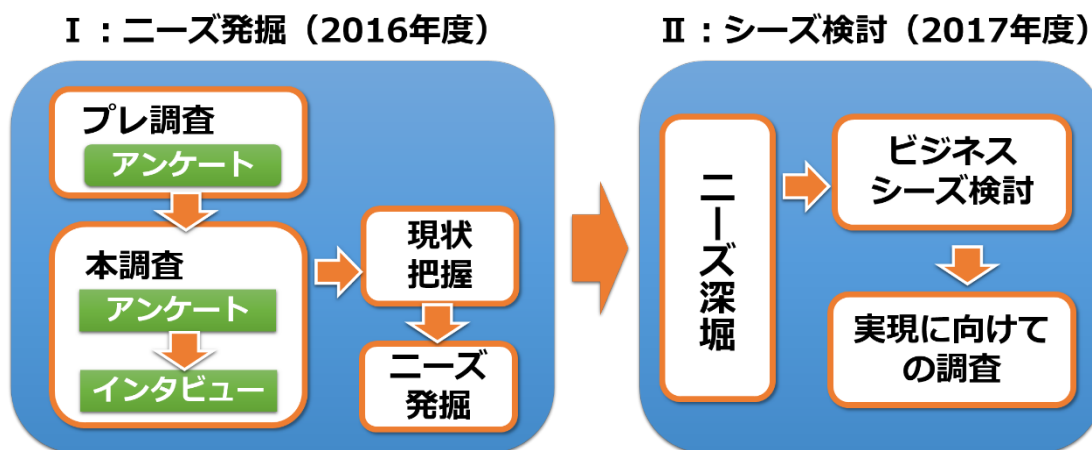


図 2 研究の進め方 (筆者作成)

### 3. プレ調査

#### 3.1. プレ調査概要

本調査実施の前に、プレ調査としてアンケート調査を実施した。これは、質問内容の妥当性を確認することが目的であるが、調査対象者に専業主婦やパート勤めの人も含め、これらとの比較の上で研究対象のフルタイム勤務者を分析することを試みた。

- 調査対象：1983 年に大学（都内 4 年生女子大数学専攻）を卒業した研究員の同窓生
- 調査方法：アンケート用紙配布、未記名回答 配布数 24、回答数 19（回答率 79%）
- 調査期間：2016 年 7 月（回答期間は約 3 週間）

#### 3.2. プレ調査結果

大学卒業後の就労状況の変遷と現在の状況により、以下の 3 つのグループに分類した(図 3)。

- A：卒業後ずっと同じ会社（グループ内転籍は同一会社とみなす）に勤務、あるいは転職経験もあるがフルタイムで働くことをやめていない、一度も専業主婦経験のないグループ
- B：現在、仕事（就職、フリーランス、在宅アルバイト）をしているが卒業後の一時期専業主婦（あるいはパートのみ）のグループ
- C：現在、専業主婦で、卒業直後の就職以外はパートか在宅アルバイトのグループ

## ■ 調査対象の就業状況（卒業後の33年間）

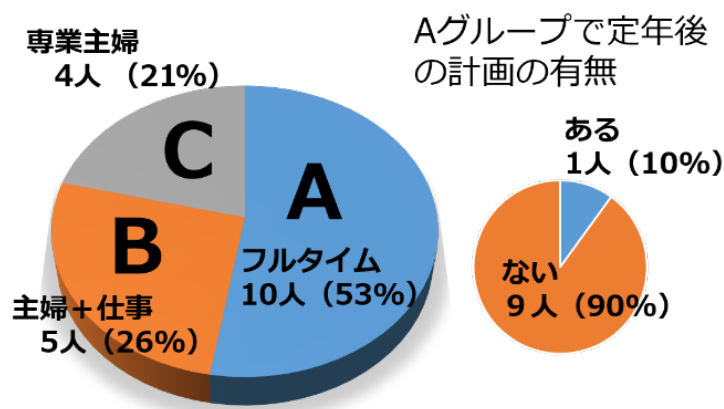


図 3 調査対象の就業状況（筆者作成）

### (1) 将来についての期待感・不安感

まず将来についての期待感と不安感について質問をした。一つのスケールではなく、期待と不安のそれぞれに対してそう思うかどうかを確認したところ、フルタイムで働くAグループが専業主婦であるCグループとは明らかに異なる傾向を示した(図 4)。

将来の不安の大きさは A > B > C の順

Aグループの不安は、定年後の生活が収入含めて一変するギャップの大きさからくるものと思われる。逆に専業主婦にとっては夫の生活が変化するだけで、自身の生活には大きな変化が予想されないためか、期待は大きいものの、不安についてはAグループと比べ、顕著に少ない。

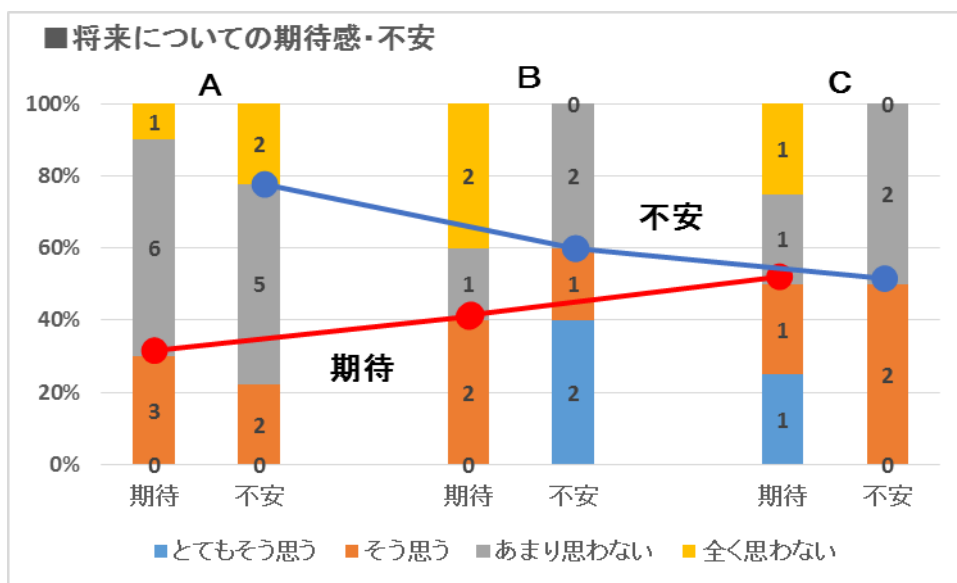


図 4 将来についての期待感・不安感 (筆者作成)

N=19

(2) 何について不安があるかの質問

不安の内容を調査したところ、フルタイム (Aグループ) は健康⇒お金⇒家族⇒生きがいの順で不安があったが、専業主婦グループ (Cグループ) ではお金と生きがいの心配は全くなく、Aグループとの顕著な違いがあった (図 5)。働いているA、Bにお金の不安があり、特にAグループにその傾向が強い。Cグループについては、お金については夫が主導しているため、また生きがいは既に専業主婦時代に得ているからと推察される。

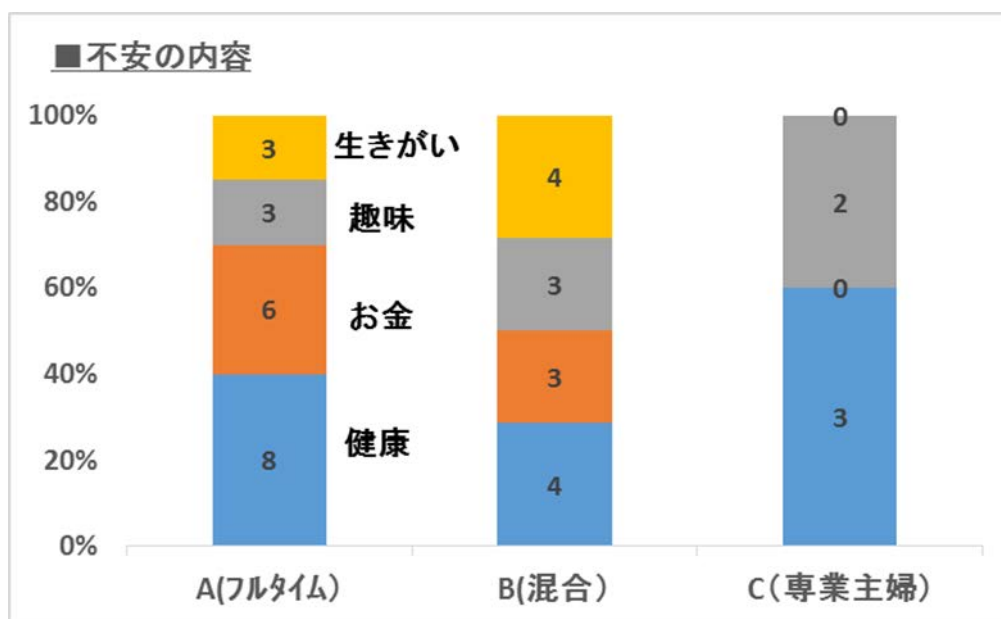


図 5 不安の内容 (筆者作成)

N=19

(3) 不安解消に必要な人についての質問

不安を解消するために必要な人についての質問についてはフルタイム (Aグループ) では、家族、志を共有できる仲間、専門的なことを相談できる健康のアドバイザー、お金のアドバイザーがそれぞれ均等にあり、遊び友達がそれに続いた (図 6)。一方で専業主婦 (Cグループ) はお金のアドバイザーは不要なものの、志を共有できる仲間は家族の次にあり、生きがいに不安はないものの、現在その生きがいを実行する志を共有できる仲間と生活を楽しんでいることがうかがえる。いずれのグループも遊び友達より志を共有できる仲間が必要なのが共通であった。

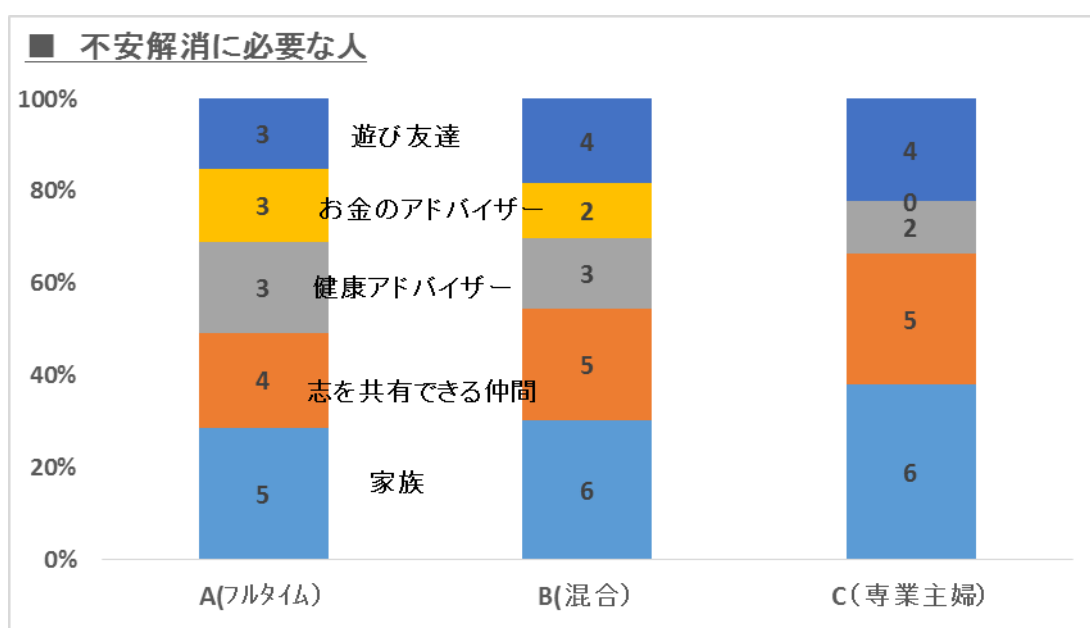


図 6 不安解消に必要な人 (筆者作成)

N=19

3.3. プレ調査まとめ

以上から、働く女性は将来 (定年後) に対する不安が大きく、専業主婦グループとは異なる結果となっている。これは働く女性が有意義に生きていきたいとは思っているものの、生活が大きく変化することが予想される定年後に対しての手本とすべきロールモデルが、男性と違って身近にないために将来像が描けないことによるのではないかと推測できる。

尚、調査サンプルが 19 名と少ないため、このプレ調査はあくまでも質問紙の妥当性のための参考としたい。

多くの働く女性たちが“定年”を迎えるこれからの時代に向けて、女性たちの定年後の不安を少しでも払拭できるようなビジネスシーズを見つけるために本調査を続けていく。

#### 4. 本調査

##### 4.1. 本調査の目的

プレ調査において、「働く女性たちは将来（定年退職後）に向けて、不安を感じている」ということが見えてきた。これは、「将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」からではないのかと推測される。そこで、本調査では、この仮説を検証するために、①何に対して、どういう不安があるのか(不安の中身と具体化)と②どう解決したいのか(不安解消のための解決策)を明らかにする。

##### 4.2. 仮説の要素分解と深堀

まず始めに、「将来に対して不安があるのは将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」からではないのかという仮説から出発し、では、なぜ「将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」のか、その理由を以下の3つに要素分解し、各要素を深堀りする(図7)。

「将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」 理由

- ① 将来像を描くためのモデル(サンプル)がないからでは?
- ② 将来像を描くための知識(お金や健康など)がないからでは?
- ③ 自分が何をしたいのか、自分に何ができるのかわからないからでは?

これらの理由をそれぞれ考えると、以下のことが考えられる。

- ① 「将来像を描くためのモデル(サンプル)がない」のは、先輩女性の数が少なく、モデル(サンプル)が周囲にいないからではないか?
- ② 「将来像を描くための知識(お金や健康など)がない」のは、そういった必要な知識を学ぶ機会がないからではないか?
- ③ 「自分が何をしたいのか、自分に何ができるのかわからない」のは、自分に向き合って、自分を分析する機会がないからではないか?

このことから、逆説的に言える疑問は、

- ① モデル(サンプル)があれば、不安は払拭されるのか?
- ② 必要な知識を学ぶ機会があれば、不安は払拭されるのか?
- ③ 自分を知る機会があれば、不安は払拭されるのか?



図 7 仮説深堀（筆者作成）

#### 4.3. アンケート設計

アンケート実施にあたって、前述の仮説から明らかにしたいそれぞれの関係性を整理し、各設問に落とし込んだ（表 1、図 8）。尚、プレ調査で実施した設問も必要に応じて盛り込んだ。

番号	項目	内容
1	不安と将来像との関係性	「将来についての不安」と、「将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」こととの関係性を明らかにする。
2	不安の中身	不安の中身を聞くことで、①モデル②知識③自己認知の3要素に分類できるのではないかと、あるいは他に必要な要素があるのかを明らかにする。
3	3要素と将来像との関係	「将来像とそこへ向けてのシナリオが描けない」ことに、①モデル②知識③自己認知の3要素がどう影響を与えているのかを明らかにする。
4	不安と属性の関係	不安と属性との関係性を明らかにする。
5	3要素の提供方法、ニーズ	将来像を描くための①モデル②知識③自己認知の3要素が、どう提供されることを望むのか提供方法のニーズを明らかにする。

表 1 アンケート設計 1（筆者作成）



## 【アンケート設計】

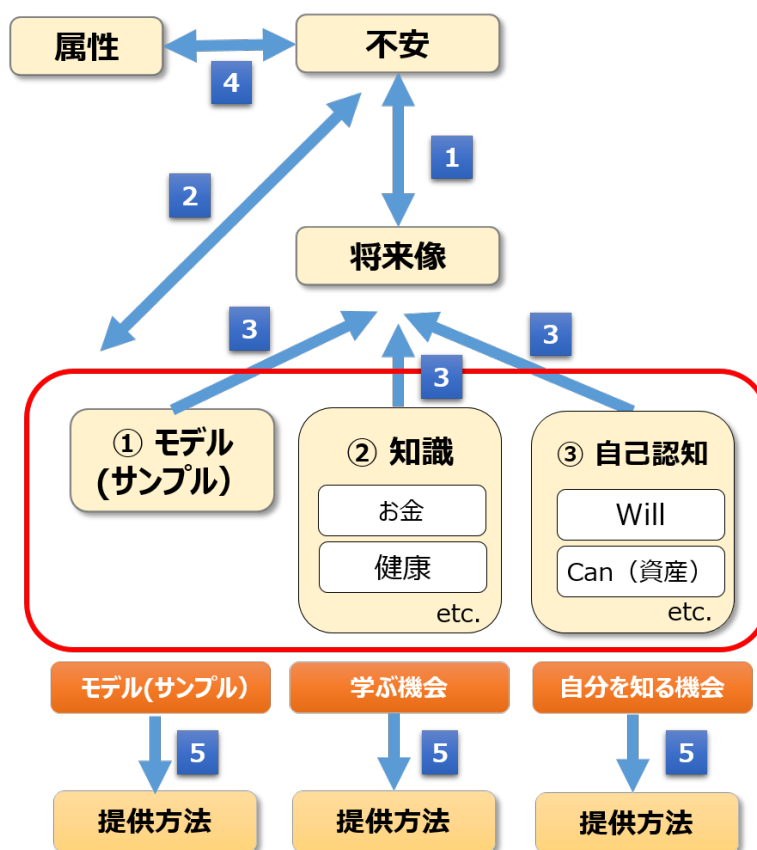


図 8 アンケート設計 2 (筆者作成)

### 4.4. 調査概要

■調査対象：40 歳から 65 歳までの企業で働く女性

■調査方法：WEB アンケート、未記名回答

(※但し、後日のインタビューに答えても良いと回答された方、及び、アンケート結果を知りたい方には、名前とメールアドレスの記載を依頼)

■調査期間：2017 年 1 月 (回答期間は約 3 週間) ※現在、アンケート実施中

## 5. まとめ

プレ調査の結果をベースに、現在、本調査を進めている。プレ調査でサンプル数が少なかったにもかかわらず、明らかにフルタイムと専業主婦層では将来に対して意識の違いがあることが判明した。又、定年後について不安があるのかどうかについての我々の漠然とした

課題意識に対して、プレ調査では多くの人が漠然とした不安を持っていることが判明したため、本調査の中で不安の具体的な内容と、その払拭のためのニーズの有無が見えてくるものと期待している。また、女性ならではの課題を浮き彫りにするために、現在、追加で男性にも同じ調査を実施している。これにより女性の定年に対する意識に男性と何らかの差があるのか、結果を待ちたい。今後、本調査の結果の分析からニーズ把握、深掘りにつなげていきたい。

### 【参考文献】

1. 相川浩之（2015）高齢者消費をリードする「豊かなシニア」『日経消費インサイト』5月号.
2. 伊藤セツ 他（2004）『女性問題研究会編 定年退職と女性～時代を切りひらいた10人の証言～』ドメス出版.
3. 岩崎博充（2014）『50歳でも間に合う 女の老後 サバイバルマネープラン！』主婦の友社.
4. 大前研一（2004）『50代からの選択』集英社.
5. 川内由加（2013）「女性定年退職者の退職後のキャリア選択要因」桜美林大学加齢・発達研究所 老年学研究科 老年学専攻 修士論文.
6. 岸本裕紀子（2015）『定年女子』集英社.
7. 倉重佳代子（2015）「これからのシニア女性の社会的つながり～地域との関わり方に関する一考察～」『富士通総研（FRI）経済研究所 研究レポート』424.
8. 厚生労働省（2015）第10回中高年者縦断調査（中高年者の生活に関する継続調査）の概況（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/judan/chukou15/>）2016.6.1.
9. 袖井孝子（1988）「定年退職一家族と個人への影響」『老年社会科学』Vol.10 No.2.
10. 徳田直子（2010）「女性定年退職者は退職後の生活において 職業経験をどのように意味づけているか」桜美林大学加齢・発達研究所 老年学研究科 老年学専攻 修士論文.
11. 徳田直子、杉澤秀博（2010）「女性定年退職者の退職後の楽しみ・生きがい：現役時代の経験との関連について」『老年学雑誌』 創刊号.
12. 日経ビジネス（2016）「特集：サラリーマン終活『定年後30年時代』の備え方」日本経済新聞社.
13. 野村浩子（2014）『定年が見えてきた女性たちへ 自由に生きる「リ・スタート力」のヒント』WAVE出版.
14. 由井義通 他（2004）『働く女性の都市空間』古今書院.
15. 横田響子（2011）『女性社長が日本を救う！』マガジンハウス.
16. リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット（2016）『LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略』東洋経済新報社.